

## サムエル記下 15 章 1～37 節

2025 年 10 月 15 日(水)

はじめに

15 章から 19 章までは、三男アブサロムが父王ダビデに対して反乱を起こした記事です。いわば「お家騒動」でありダビデ王朝にとっては不名誉なことですが、聖書がこの記事を長く取り上げるのはどうしてなのか。この点については、学んでいくうちに明らかになるでしょう。

本日学ぶ 15 章は、ダビデがアブサロムとの戦いを避けるために、エルサレムから脱出した記事です。ダビデの「都落ち」です。この記事は、1 節でアブサロムが武装したという記事から始まり、37 節はアブサロムがエルサレムに入城したことで終わっています。アブサロムの反乱の第一段階は成功したわけです。

## I サムエル記下 15 章 1～37 節の話の流れ。

サムエル記下 15 章 1～37 節の話の流れを見てみましょう。

1 節。アブサロムが私的な軍隊を組織した記事です。これは、反乱の芽となるものでした。

2～6 節。アブサロムの反ダビデの宣伝工作。彼は、ダビデが王として公平な裁きができないが、自分は公平な裁きできる、と言い続けたわけです。そのようにして「イスラエルの人々の心を盗み取った」わけです。

7～9 節。アブサロム、ダビデ王にヘブロンに行く許可を求め、許される。

10～12 節。アブサロムの「陰謀」(12 節、31 節)。

①アブサロムは全部族に密使を送り、角笛を合図に、「アブサロムがヘブロンで王となった」と言うように命じる。

②アブサロムはダビデの顧問であるギロ人アヒトフェルを迎え、おそらく王宮にいる人々に対して、アブサロムに就くように陰謀を企てた。こうして「アブサロムのもとに集まる民は次第に数を増した。」つまり反ダビデ、親アブサロムが優勢になったということです。

13～16 節。ダビデ、エルサレムを脱出する。

ダビデは、人心がアブサロムに移ったことを知らされます。そこでダビデは家臣全員に、アブサロムがエルサレムを剣にかけることのないように、脱出するように告げました。戦争を避けたわけです。尚、王宮には 10 名の側女を残しました。彼女たちは留守番役であって、非戦闘員として、王宮の維持管理を行う。

17～23 節。ダビデとその家臣たちには、ペリシテ人系の「傭兵」も従った。その中でガト人のイタイの言葉は注目に値します。「生きるも死ぬも、主君、王のおいでになるところが僕のいるべきところです。」彼はこのように言って、ダビデ王に対して忠誠を表明したのです。こうしてダビデたちは、エルサレムの東のキドロンの谷を渡り、オリーブ山の坂道へ向かいます(30 節)。

24～29 節。ダビデは、祭司ツアドクをはじめ、レビ人全員は神の箱を担いで来ていましたが、ダビデは彼らにエルサレムに戻るよう命じています。理由は「わたしが主の御心に適うのであれば、主はわたしを連れ戻し、神の箱とその住むところを見せてくださる」からなのです。ここにダビデの信仰が明瞭です。またこの時、ダビデは、ツアドクの息子アヒアマツとアビアタルの息子ヨナタンをダビデとの連絡係にしました。

30～36 節。ダビデたち、「頭を覆い、はだしでオリーブ山の坂道を泣きながら上る」とあります。

これは、神に向かって悔いを示すものです。ダビデは、オリーブ山の頂上の礼拝所でアルキ人フシャイに会いました。彼は「**ダビデの友**」でした(37 節)。ダビデは、彼にアブサロムの許へ行くように命じます。そしてアヒトフェルの策謀を覆すことができるといっています。つまりダビデの顧問官であるアヒトフェルと「**ダビデ王の友**」であるフシャイが拮抗しているのです。

また、ダビデは、フシャイが祭司ツアドクとアビアタル、また彼らの息子たちであるアヒアマツとヨナタンと行動を共にし、ダビデに彼らをとおして状況を知らせるようにと命じています。したがってフシャイをリーダーとして、祭司ツアドク、アビアタル、アヒアマツ、ヨナタン、そして 10 名の側女たちは、敵の中にあつて、ダビデの味方をするネットワークを築いたということです。彼らは祭司たちと女たちであり、皆非戦闘員ですから、直接アブサロムとその軍が戦うべき者たちではないわけです。

37 節。フシャイがエルサレムに入ると、アブサロムもエルサレムに入城したといっています。明らかに、ダビデの意を受けたフシャイが一步先んじている、と告げています。

以上を箇条書きにすると次のようになります。

- 1 節        **アブサロム、私的な軍隊を持つ**
- 2～6 節    **アブサロムの、反ダビデの宣伝工作**
- 7～12 節   **アブサロムの陰謀**
- 13～16 節   **ダビデの「都落ち」、エルサレムからの脱出**
- 17～23 節   **ダビデの部下、イタイの忠誠**
- 24～29 節   **ダビデ、祭司たちをエルサレムに戻す。ダビデの信仰。**
- 30～36 節   **ダビデ、友であるフシャイにエルサレムに留まるように命じる。**
- 37 節       **アブサロム、エルサレムに入城。**

## Ⅱ. サムエル記下 15 章 1～37 節の解説

### 【1～12 節】

アブサロムは、ダビデ王の裁判が正当なものではないことを宣伝しました。これは、彼にとっては妹タマル凌辱事件、また自らが犯したアムノンの殺害事件において、父王ダビデが公平な裁判を行わなかったことへの不信と不満に基づくものであったと思われます。

またアブサロムの宣言工作が実を結んだのは、もちろんダビデ王の統治に対して不満を持つ者たちがいたからです。しかしアブサロムは、その不満を敢えてクローズアップして強調し、反ダビデに傾くようにしたわけです。

またアブサロムは、ヘブロンで王となったことを告げさせました。これは、ダビデ王の真似です。ダビデ王も、まずヘブロンで王とされ、次に、エルサレムにおいてイスラエル全体の王となりました。息子であるアブサロムは、それと同じ歩みをしています。

この時、ダビデの王の顧問官であるアヒトフェルがアブサロム側につき、人心がダビデから離れアブサロムに就くように工作しました。このアヒトフェルという人については、サムエル記下 23 章 34 節では「**アヒトフェルの子エアリム、ギロ人**」とあります。ダビデの三十人の勇士の一人であるエリアムの父であるわけです。そしてエリアムは、バト・シェバの父なのです(Ⅱサム 11:3)。ですからアヒトフェルはバト・シェバの祖父であるわけで、彼がダビデの犯した罪のゆえに、ダビ

デに不信感と反感を抱き続けたことは十分想像できることでしょう。何しろダビデは、かつてバト・シェバを寝取った上で彼女の夫ウリヤを激戦地に派遣して討ち死にさせたわけですから、好意をもつのは難しいのではないのでしょうか。そう考えると、アヒトフェルが、アブサロム側につき、反ダビデの工作をしたのも納得できることでしょう。

#### 【13～16 節】

こうした中で、ダビデ王は家臣団を連れてエルサレムを脱出することになります。家臣団にとっては、かつてサウル王の追撃を逃れて放浪したことがありますから、出来ないことではないわけです。この「ダビデの都落ち」は、もちろん第一に自分の息子であるアブサロムとの戦いを避けるためであり、第二にエルサレムが戦場とならないようにするためです。

尚、ダビデは王宮には 10 名の側女を残しました。聖書の註解者の中には、無力な彼女たちを王宮に残したところで、何を守れるかと疑問をいう者もあります。しかし彼女たちは、非戦闘員であってアブサロムの戦いの相手ではありません。さらに彼女たちの中にはアブサロムと顔見知りの者もあったかもしれません。彼女たちは、王宮においてアブサロムとその軍隊に食事を提供するなどもてなし、懐柔策を行うことができると思われます。目的は、王宮が荒らされたり、破壊されたりしないようにするためです。王宮の維持管理を続けることが彼女たちに託された仕事であるわけです。

#### 【17～23 節】

さてこの部分では、ダビデがエルサレムを脱出して、「我々と共に放浪者」になる者を受け入れた記事です。その中には、クレタ人全員、ペレティ人全員がいました。彼らはペリシテ系の民族であり、傭兵としてエルサレムにいた者たちでしょう。さらにペリシテ人の町ガド出身のイタイが率いる 600 名の傭兵がいました。ここでは特にイタイの忠誠の言葉が光っています。彼は「主は生きておられ、わが主君、王も生きておられる。生きるも死ぬも、主君、王のおいでなところが僕のいるべきところです。」そのように言いました。賞賛に値する忠誠の言葉です。

この言葉はもちろんダビデ王に対するものです。しかしそれだけにとどまりません。イエス・キリストに対するわたしたちの忠誠を示す言葉でもあるといつてよいのです。実際、パウロはローマの信徒への手紙 14 章 8 節で次のようにいっているからです。「わたしたちは、生きるか死ねば主のために生き、死ぬか死ねば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。」といっています。

#### 【24～29 節】

さらにダビデの許には、祭司ツアドクと神の箱とそれを担ぐレビ人たちがいました。ダビデは彼らにエルサレムように戻るようにと命じています。これは異常なことです。通常、神の箱と共に逃亡するものだからです。神の箱は神の御臨在のしるしであって、自分たちの側にこそ神が共にいることを示し、正当化できるからです。しかしダビデはそうに神の箱を自分の都合のために用いていなかったのです。ダビデは次のように言いました。「**神の箱は都に戻しなさい。わたしが主の御心に適うのであれば、主はわたしを連れ戻し、神の箱とその住むところを見せてくださるだろう。**」(25 節)とあります。ダビデは、自らの運命を神に委ねたのです。ここにダビデの本来の信仰があるのです。

またこの時、ダビデは、祭司ツアドクとその息子アヒアマツ、また祭司アビアタルの息子ヨナタンに対して、エルサレムに戻ったなら、彼らをダビデとの連絡係に任命しています。

## 【30～36 節】

以上のようにしてダビデと家臣団は、キドロンの谷の向こうにあるオリーブ山の坂道を登りました。「**ダビデは頭を覆い、はだしてオリーブ山の坂道を泣きながら上って行った。同行した兵士たちも皆、それぞれ頭を覆い、泣きながら上って行った**」とあるとおりです。

ここでは、ダビデと家臣団と兵士たちの悔い改めの姿が印象的です。アブサロムの反乱という不幸は、アブサロムが間違っていて自分たちが正しいといったこととして見つめていません。神に対する不忠実から出た不幸として受け止めています。だから神に向かって悔い改めを示して泣いたのです。

さてダビデは、オリーブ山の地上でアルキ人フシャイという人に出会いました。この人は「ダビデの友」といわれています。これは個人的な友人とも考えられますが、むしろ「王の友」という役職についた者であると思われます。したがってダビデには顧問官アヒトフェルと「王の友」フシャイがいたわけです。そしてアヒトフェルがアブサロムの側につき、反ダビデの工作をしています。それに対抗し、彼の策謀を覆すことが出来るのは、フシャイなのです。そのためダビデはフシャイに対してエルサレムに留まるように命じました。こうしてフシャイをリーダーとして祭司ツアドク、アビアタル、アヒアマツ、ヨナタンと協力して、状況を報告するように命じています。この働きには、もちろん 10 名の側女たちも加わっているわけです。つまりダビデは、敵であるアブサロムとその軍隊の中に、ダビデの味方となる者たちを配置したわけです。いわゆるスパイ・ネットワークを作ったということです。

## 【37 節】

このような中に、アブサロムは、エルサレムに入城したわけです。彼の動静は、フシャイとそのグループをとおして、父王ダビデに筒抜けになるわけです。その意味では、アブサロムは父王ダビデの手の中に入城したともいえるのです。

人間の目から見れば、ダビデたちは圧倒的に不利です。しかしそのような状況の中で、ダビデは自らの運命を主に委ね、息子アブサロムに対してきちんと把握するために、フシャイを始めとするダビデの仲間のネットワークを築きました。このようにしてダビデはアブサロム反乱の解決の糸口を見つけようとしているのです。

なお、こうした姿勢は、今日のイスラエル共和国にも受け継がれているようにみえます。大きな戦争にならないように、敵側の諸国にスパイ・ネットワークを置き情報収集し、適切な対応をしている、といわれます。